

大学生における ADHD 特性とコーピングが 心理的適応に及ぼす影響に関する研究 —コーピング柔軟性に焦点を当てて—

○松川奉央 (駿河台大学大学院)

永作 稔 (駿河台大学大学院)

キーワード: ADHD, コーピング柔軟性, 心理的適応

問題と目的

大学における障害学生における発達障害学生の割合は年々増加している (日本学生支援機構, 2014)。発達障害のある学生には, その障害特性からさまざまな適応上の困難さが想定され, 中でも ADHD のある大学生は, 学習スキルの獲得の遅れ (Norwalk, Norvilitis, & MacLean, 2009) 時間的見通しのつきにくさ (Prevatt, Lampropoulos, Bowles, & Garrett, 2011), など, 大学生活に必要な計画性や自己管理, 自己抑制など種々のスキルの獲得が遅れていることにより, 大学での適応に困難が生じている (Barkley & Murphy, 2006)。学生生活上の様々な課題に対処し, 適応へと支援するうえで, ADHD のある大学生のコーピングと大学適応との関連を検討することは意義があると考えられる。

ところで, 加藤 (2001) は, 大学生のストレス対処と適応の関連についてコーピングの柔軟性という観点から検討を行っている。コーピング柔軟性とは“あるストレスフルな状況下で用いたコーピングがうまく機能しなかった場合, 効果的でなかったコーピングの使用を断念し, 新たなコーピングを用いる能力”と定義され, これが豊かである学生はより適応的であることを示している。加藤 (2001) は一般大学生を対象とした研究であるが, ADHD の障害特性を考慮すると, 彼らが計画性や柔軟性に欠けるコーピングを行っている可能性があると考えられる。したがって, 彼らを支援するための切り口としてコーピング柔軟性は有用性のある概念であると推察される。

そこで本研究では大学生を対象に ADHD 特性とコーピング柔軟性, および心理的適応の関連を検討することを目的とする。

方法

研究協力者 首都圏私立大学に在籍する 168 名 (男性 98 名, 女性 70 名: 19.0 歳 $\pm$ 0.69)

調査時期 2017 年 4 月

調査材料 1. ADHD 特性尺度 (篠田, 2008)
2. 成人用エフォートフル・コントロール尺度 日本語版 (山形ら, 2005) 3. 気分尺度 (福岡, 2011)
4. コーピング柔軟性: 尾関 (1993) の大学生ストレス自己評価尺度の「コーピング尺度」を用いて, コーピング柔軟性を測定できるように, 伊勢ら (2015) を参考に改変した。

結果と考察

まず, 加藤 (2001) を参考にコーピング相対量を計算し, その値が 40% 以上になるコーピング (問題焦点, 情動焦点, 回避逃避) をもって, 各調査協力者のコーピングタイプ (以下 CT) とした。なお, 40% 以上が二つ抽出された場合は混合型一つも抽出されない場合は全定型とした。さらに, 一回目の CT と二度目の CT (一回目のコーピングが失敗したという仮定で評定された二回目のコーピング) はコーピングの柔軟性の定義より, コーピング失敗状況において“失敗したコーピングの使用を断念すること” (水準 A), “新たなコーピングを使用すること” (水準 B) の二つの水準から比較された。水準 A を満たすことを A, 満たさないことを noA とすると, A-B 群は 33 名, A-noB 群は 73 名, noA-B 群は 24 名, noA-noB 群は 37 名であった。ADHD 特性尺度得点とその下位尺度である不注意得点, 多動・衝動性得点のそれぞれについて水準 A, 水準 B を要因とする 2 要因分散分析をおこなった結果, 多動・衝動性得点において水準 B の主効果 ($F(1, 163)=4.57, p<.05$) が有意であった。Table 1 に多動・衝動性得点の平均値, 標準偏差を示した。したがって, ADHD 特性のある学生は新たなコーピングを使用することに欠けるコーピングを行っている可能性があり, 仮説が一部支持された。

Table 1 コーピング柔軟性と多動・衝動性得点

		水準 B		水準 A の平均
		B	noB	
水準 A	A	1.64 (.47)	1.89 (.44)	1.75 (.47)
	noA	1.70 (.41)	1.80 (.60)	1.73 (.48)
水準 B の平均		1.68 (.43)	1.83 (.53)	1.74 (.48)

注) 括弧内は標準偏差。

つぎに, ADHD 傾向と適応との関連を検討するため, ADHD 傾向とエフォートフル・コントロール (以下, EC), およびポジティブ・ネガティブ気分との相関分析を行った。その結果, ADHD 傾向が高いほど EC が低く ($r=-.65, p<.01$), ネガティブ気分が強いことが示された ($r=.33, p<.01$)。ADHD 傾向とポジティブ気分との間には有意な関連が見られなかった。このことから ADHD 特性をもつ大学生ほど, その特性から学校生活において躓きがあり, 心理的に不適応な状態に陥りやすいという可能性が示唆された。